

「I was born」の授業

第2回〈全5回〉

渡辺 良光

「I was born」の一連から五連を再掲する。

確か 英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いていくと 青い夕靄の奥から浮き出るように、白い女がこちらへやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の 柔軟なうごめきを 腹のあたりに連想し それをやがて世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は<生まれる>ということが まさしく<受身>である訳を ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

—— やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

—— I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね——

補足の発問④「どういう日の『夏の宵』なのか？」と投げかける。「どういう日」で分からなそうだったら、「特別の日だったと思うんだけど」とヒントを与える。『『青い夕靄』がかかっていた日』『『身重』の女の人に逢った日』等、教師がここで求める

答えが出ない場合、一端「そうだね」と受け止め『父と一緒に寺の境内を歩いてゆく』に着

目させる。「この言葉はちょっと変わっているね」と言いながら、補足の発問⑤「この一週間、一か月でもいいや、お父さんとお寺の境内を歩いた人いますか？」と問いかけてみる。退職までの約三十年間、幸運なことに「はい」と答えた生徒はいなかった。いたとしたら、その生徒には申し訳ないが、その時の状況を聞き、悲しいことだが、教師の求める答えに導くしかないだろう。誰も手を挙げなかったらさらに、「みんなが夏の夕方、お父さんとお寺に行く可能性のある日は？」と、答えを促す。やっと「お盆」という答えがでてきそう。「そうだね。迎え盆か送り盆かは分からないけど」などと、答えを認める。

補足の発問⑥「それから他には？」と、もう一つの教師の求める答えを考えさせる。勘の良いせいとは、「お母さんの命日」と答えるだろう。そういう生徒がいない場合、補足の発問⑦「お寺に来たんだから、誰かのお墓参りだよ。誰のお墓かな？」と問いかける。大抵「お母さんのお墓参り」と答えが出る。それに対し、補足の発問⑧「お母さんの命日が、『夏』だと、なぜ分かるのか？」と問いかける。虫に詳しい生徒がいる場合、『『蜉蝣の雌』を見て、すぐに『死なれた』からと、教師の求める答えが出よう。しかし、出なかった場合は、教師が『『蜉蝣』は季語としては秋だが、現代では七～九月に当たることを説明し、ついでに「七夕」も季語としては秋だとか触れながら、母の命日であるかもしれないことを伝える。(私個人としては、『白い女』も墓参の人と考えられるので、お盆を正答としたい。)

「はじめの一、二行でこれだけのことを表現しているんだ。詩は面倒くさいかな？それとも凄いいかな？詩ってというのは、なるべく説明を省くんだ。書いてあれば、分かってもらえ

る、書いてないと自分の伝えたいことが、分かってもらえない最小限の言葉を選んで、書かれているんだ。」などと、詩の表現の特長を説明してみる。次に進む。

補足の発問①「『青い夕靄』って書いてあるけど、『夕靄』って青いのか？」聞いてみる。色々な答えが出て、「作者が『青い』って書いているんだから、『青い夕靄』でいこう。」と流しておく。

発問Ⅱ 『白い女』とは、どういう女か？根拠なしでもいいから答えよ。

補足の発問①の答えは、『白い女』を際立たせるためである。この『白い女』の発問に正答できてしまうと、もうこの詩全体が読めたと言える。そこで、答えとしては、根拠なく、なるべく広い答えを認めておく。「妊娠した人」など、教師がどきりとする答えでも板書する。生徒にとっては、自分の答えが板書され認められるのは、うれしに違いない。補足の発問②「みんな、向こうから『白い女』がやって来るなんて、普通言うか？根拠はいらぬから、『白い女』ってどんな女だ？」と発問を繰り返し、『白い女』という表現は、普通しないことを強調する、生徒の想像力に訴える。「白い服を着た女の人」「色の白い人」「白人」「幽霊」など、様々な答えを板書していく。

語句の意味の確認。「物憂げ」「身重」「気兼ね」「胎児」「柔軟」等、学力に応じて辞書で調べさせ、意味を確認させる。

発問Ⅲ 『父に気兼ねしながら』とあるが、なぜ、父親に気を遣って女の腹を覗いたのか？

と、思春期にある『僕』の気持ちを想像させる。「なんとなく恥ずかしい」「照れくさい」などと答えが出れば肯定し、さらに教師が「感受性が豊かな人なんだね」とか付け加えておく。答えがない場合は、「みんなほど無粋な人じゃないんだ」「先生が父親だったら、『こいつ女に興味を持つようになったのか』と、思ったり言ったりするね。」などとつぶやいておく。

発問Ⅳ 『女はゆき過ぎた』だけ、前後一行空けて独立しているのはなぜか？答えよ。

この発問も、詩全体に大きな意味を持つかもしれない。ここでは「時間経過」のみを求める答えとするが、補足の発問①「どのくらいの時間か？」を問う。次の『少年の思いは飛躍しやすい』から『ゆき過ぎて』直ぐのことを正答としたい。なかなか求める答えが出ない場合は、「『女はゆき過ぎた』から『少年の思いは飛躍しやすい』まで、どれほどの時間が経っているのか」問い直す。それでも答えが出ないときは、補足の発問②「一時間と一分だと、どっちが近いか？」具体的に聞いていく。「一時間」と答える生徒がいたら、「一時間で何キロくらい歩けると思う？」等考え直させる。「じゃ、三十分と一分は？」と、だんだん狭める方法もあろう。

確認の発問「『少年の思いは飛躍しやすい』の『少年』は、具体的には誰か？」確認する。

『僕』のことであり、一般的な中二か中三の年頃の『少年』。「みんなも、突飛な発想をするよね。『白い女』が『幽霊』だとか、『白塗りの女』だとか。それでいいんだ」とか付け加え、自由な発想、発言を喚起し、授業もその雰囲気を持っていく。

確認の発問「『その時』とはいつか？」確認する。発問Ⅳをしているので、すぐに「『女がゆき過ぎた』とき」と答えが出よう。

語句の意味の確認。「諒解」「怪訝」「無邪気」「察する」等。

発問Ⅴ <生まれる>という言葉、『受身』で言い換えている部分を探し、答えよ。

多くの生徒が『生まれさせられる』に気づくと思う。補足の発問①「<生まれる>と『生まれさせられる』では、感じが違うと思うが、どう違うか？」考えさせる。なるべく生徒が感じたままの答えがほしいが、出なければ、『受身』を辞書で調べさせる。『受身』には、自分自身が積極的に希望していないニュアンスがあることに触れる。(つづく)